

東日本の被災現場から防災学が 台風被災のフィリピン人若者

国連防災世界会議

3月中旬に仙台市で開催された国連防災世界会議に、2013年にフィリピンを襲った台風ヨランダの被災者などフィリピン人の若者3人が参加した。3人は、日本滞在中に岩手県や宮城県にある三陸沿岸の現場を訪れたほか、東日本大震災で被災した日本の大学生とも交流、防災の大切さにつ

いて意見交換した。会議に招かれたのは、ピサヤ地方レイテ州出身のチャールズ・マナランさん(25)、フランシスコ・パンギスさん(21)、ミンダナオ地方東ミサミス州カガヤンデオロ出身のジェッサ・ラピラップさん(20)の3人。3人は会議前に、津波で甚大な被害を受けた岩手県陸前高田市、宮城県気仙沼市、南三陸町を訪問。自治体や被災者の具体的な復興への取り組みについて現場から学んだ。11年12月にミンダナオ地方北部を横断した台風センドンで被災したラピラップさんは、かさ上げ工事が進む陸前高田市をみて驚いたという。ラピラップさんはフィリピンの復興速度とは違う。自治体と被災者が必死に取り組んでいることが伝わってきたと話した。ヨランダ被災者のマナランさんは、フィリピンよりもはるかにインフラ設備が整備された日本でも、多くの人々が大災害の被害を受けていた厳しい事実を指摘。レイテ州政府の職員として働くマナランさんは「堤防などインフラ設備に頼りすぎるのではなく、住民が一体となって防災力を高めることが重要だ」と強調した。今後、地元で避難訓練などを計画、実施したいと話した。

マナランさんはまた、被災後の人口流出や労働力不足が続く東北被災地を見て、1億人を越えて人口増が続くフィリピンと比較しながら「フィリピン被災地の強み」も発見したという。被災後も沿岸部に掘っ立て小屋を作り、住み続けている多くの比住民たちに安定した職を提供できれば、「新たな街作り」に弾みがつくのではないかと感じたという。

フィリピン大学タクロバタ卒業生のパンギスさんは会議後も、無料通話アプリ「LINE(ライン)」を通じ、日本の学生と交流を続けているという。パンギスさんは「いつか彼らをタクロバタ市に招待したい」と夢を語った。3人は3月15日、同会議のバブリックフォーラムの一環として開かれた特別セッションに参加。特別ゲストとして安倍昭恵首相夫人も出席した。同セッションは一般財団法人の教育支援グローバル基金が主催、国際交流基金マニラ日本文化センターが協力した。

安倍昭恵首相夫人と記念撮影する比人台風被災者3人
＝国際交流基金マニラ日本文化センター提供

